The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

印度學佛教學研究第六十一巻第一号　平成二十四年十二月

瑩山紹瑾と『仏慈講式』
――總持寺系と永光寺系の相違点について――

ミヒャエラ・ムロス

はじめに

講式とは日本仏教の特有な儀式であり、その中には高僧に対して報恩を示すために書かれた報恩講式という講式分類が存する。曹洞宗では永平寺開山道元（一二〇〇～一二五三）と總持寺開山瑩山紹瑾（一二六四～一三三五）と總持寺第二祖峩山韶碩（一二七五～一三六六）に対する報恩講式が行われてきた。瑩山を讃えるものには『仏慈講式』（撰述者不明、江戸初期か）と『洞上伝灯講式』（宝山梵成撰、明治二五年（一八九二）頃）が存するが、本考では『仏慈講式』について考察するものである。

一　先行研究

まず、『仏慈講式』についての先行研究を紹介したい。鶴見大学の尾崎正善氏は一九九八年にそれまで発見されていた『仏慈講式』の写本を紹介し、全文を翻刻された。(1) また、尾崎氏は一九九九年にさらに詳しく考察を加え、諸本の相違点を分析した結果、『仏慈講式』には總持寺系と永光寺系という二つの系統があることを明らかにされた。(2)

私は二〇〇九年に『仏慈講式』と明治二五年（一八九二）頃に總持寺の後堂老師・宝山梵成（？～一九〇六）によって書かれた『洞上伝灯講式』について発表した際、大正一三年（一九二四）に印刷された永光寺系の『太祖佛慈講式』という新しく発見された版本を紹介した。その本は明治二五年頃に永光寺五一〇世孤峰白巌（一八四五～一九〇九）によって編集された『仏慈講式』の再版本である。白巌の『仏慈講式』とそれ以前の『仏慈講式』とでは相違点が多い。一方、白巌の『仏慈講式』は同時期に宝山梵成によって書かれた『洞上伝灯講式』と比較すると、似ている箇所がいくつか存したため、その二つの講式が互いに影響関係にあったのではないかと論じた。(3)

二　『仏慈講式』の諸本

次に『仏慈講式』の諸本について触れたい。まず、これまで発見された『仏慈講式』の諸本を列記しておきたい。(4)

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

永光寺系

①永光寺蔵『開祖講式』写本、正徳五年（一七一五）、伽陀集

②永光寺蔵『佛慈講式（仮題）』写本、年不詳（～一七二五）、式文、祭文

③永光寺蔵『佛慈講式祭文（仮題）』写本、文政一〇年（一八二七）、祭文

④金沢市立玉川図書館近世史料館『佛慈講式』版本、明治二五年、全文

⑤門野金山文庫蔵『太祖佛慈講式』版本、大正一三年（一九二四）、明治二五年の再、全文

總持寺系

①總持寺祖院蔵、照陽寺蔵、門野金山文庫蔵『佛慈講伽陀並四智讃』写本、元禄七年（一六九四）、伽陀集

②總持寺祖院蔵、門野金山文庫蔵『伽陀並法要』写本、元禄七年（一六九四）、伽陀集

③山口県太寧寺蔵『開山国師佛慈講式』写本、文化三年（一八〇六）、式文

④總持寺祖院蔵、門野金山文庫蔵『三講伽陀並法要』写本、文化一〇年（一八一三）、伽陀集

⑤新潟県雲洞庵蔵『諸嶽国師禅師講式本』写本、嘉永二年（一八四九）、式文

⑥總持寺祖院蔵『仏慈講式伽陀』写本、江戸末期か、伽陀集

⑦總持寺祖院蔵『傳燈講式　維那用』写本、明治一一年以降、伽陀集

⑧總持寺祖院蔵『傳燈講式　式師用』写本、明治一一年以降、伽陀集

列記した中で、『佛慈講伽陀並四智讃』（總持寺系①）と『伽陀並法要』（總持寺系②）は最古の本であり、ともに同じ元禄七年（一六九四）に書写されたものである。さらに、管見のかぎり、『仏慈講式』に関する最も古い記事は延宝七年（一六七九）に書かれた「諸嶽山總持禅寺諸行事」の中に見られる。「諸嶽山總持禅寺諸行事」は寺社奉行に提出した總持寺の日中・月中・年中行事を記したものであり、その中に仏慈講式のことが記されている。[5]『仏慈講式』は少なくとも一七世紀には構成されていたものと推測される。

『仏慈講式』の中にみられる瑩山について調べるためには、式文や祭文の内容を分析する必要である。しかし、元禄頃に写された式文や祭文は残されていない。今のところ、最古の式文は永光寺所蔵の『仏慈講式（仮題）』（永光寺②）であり、それは享保九年（一七二四）頃に書かれたものであろう。

三　總持寺系と永光寺系の相違点

『仏慈講式』はおそらく永光寺か總持寺のいずれかで最初に書かれたと考えられ、一方が他方の講式に基づいて内容を改変して編集したのではないかと思われる。尾崎氏は式文の

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

出典に永光寺蔵の文献が多いことから、最初に書かれたのは永光寺であった可能性が高いと論じており、(6) 私も内容を見ると、同様に推測している。『仏慈講式』が基づいた史料は永光寺系の瑩山伝記である『洞谷五祖行実』であったと考えられる。また、例えば、式文の第二段には「酒勾・海野檀越飽嘗法味、遇剃度」と書かれているが、この文章は總持寺系と永光寺系の両方に見られる。酒勾と海野とは永光寺の檀越であった酒勾八郎頼親の娘と海野三郎滋野信直のことであり、二人は總持寺とは直接関係がないのである。こうした点からもすると、『仏慈講式』は永光寺で最初に書かれたものであろうと推測される。

瑩山の伝記史料は總持寺系の瑩山伝と永光寺系の瑩山伝に大きく分けられ、両方の伝記の中でも説明の詳略や内容の相違点が見られるが、同様に『仏慈講式』にも永光寺系と總持寺系が存している。尾崎氏は總持寺系と永光寺系の相違点として三点を明らかにされており、第三の相違点について、

第三の相違点は、「永光寺本」で永光寺の由来に関する記述が記される部分が、「太寧寺本」ではそっくり總持寺の由来に関する記述に改められている点である。(7)

と述べている。この相違点は講式の第一段に関するものであるが、本稿ではその記述について詳しく考察したい。

第一段ではまず瑩山の前世、母の霊夢と出産、孤雲懐奘の下での出家、寂円・義演・徹通義介の下での修行、大乗寺の第二世として行なった布教などが記されている。この箇所までの記述は永光寺系と總持寺系でほぼ同文である。その後、永光寺系は永光寺のことのみを、總持寺系は永光寺と總持寺のことを説明しており、系統によって内容は大きく異なっている。永光寺系の写本（永光寺系②）では以下のように永光寺について詳しく説明されている。

一日師動隱退懐。時有能州府主酒勾八郎平氏頼親女法名祖忍・同夫信州海野三郎滋野信直等、請到本州、俱盡供敬。且探當山幽邃、告之。師愜隱棲思。於茲詔于鎌倉官衙、施地建寺。藉氣多幽賛、令護法安衆、號山於洞谷、慕洞山古風、扁寺於永光、仰太陽遺烈。榎樹枝頭掛破艸鞋、下馬松下設金剛圈。妙莊嚴院特地開、香積國土當處現。加旃、朝定建最勝殿、嚴啓祝釐道場、家方造普光堂、始演師承所據、行房公書七堂額字、為寺鎮。祖忍尼奉観音、住圓通。定賢感夢、南帝垂問。九應衆請、八坐道場。就中當山者、五老四哲護一峯、三聖二天推二輪。

以上のようにまず、瑩山が大乗寺を退院し、能州（能登）の酒勾八郎頼親の娘（祖忍）と夫である海野三郎滋野信直から請されて、寺院を開いて、洞谷山永光寺と名付けた。山号は洞山良价の古風を慕って洞谷と、寺号は大陽警玄の遺烈を慕って永光と称したと述べている。ところが、本史料では、その後「大陽」が消されて、「永平」と書き変えられている。永平とは日本曹洞宗の初祖である永平道元のことであり、永

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

光寺を道元と関連づけることで、永光寺の立場を高めようとしたと推測される。この例から講式のテキストはこれを用いる僧侶の意識や考え方によって内容が書き変えられるものであることが改めて知られる。「榎樹枝頭掛破艸鞋、下馬松下設金剛圈」という文章は景観の素晴らしさと修行僧の多数について述べたものである。さらに、寺内の諸堂宇が建てられたことについて説明する。妙荘厳院は方丈のこと、最勝殿とは仏殿のこと、普光堂は法堂のことであり、また七堂の額字が書かれたこと、円通院に観音像が奉じられたことが述べられている。「定賢感夢、南帝垂問」あるのは、定賢は霊夢を感じて總持寺を瑩山に譲与したこと、後醍醐天皇が瑩山に勅問を下したことを述べたものである。

このように永光寺の『仏慈講式』には總持寺のことも暗に示されているが、總持寺については何ら書かれておらず、總持寺という寺名は一度も述べられていない。また「九応衆請、八坐道場」とは瑩山が住持した寺院の数について述べたものであり、瑩山の「山僧遺跡寺寺置文記」に示した八ヶ寺に城満寺を加え九ヶ寺と見られ、その中には總持寺も含まれている。

次に總持寺系（總持寺系③⑤）の記載について触れたい。總持寺系では瑩山が大乗寺を退いてから總持寺を開くまでのことを次のように記している。

瑩山紹瑾と『仏慈講式』（M・ムロス）

應長改元、謝院事、動退鼓。凡諸候・庶民、無不望風瞻敬。或建寺迎師、居焉。城満、浄住、孝光（光孝か）等也。時能州滋野信直及夫人平氏、欽其徳、於酒井保施一山、創伽藍、請為開山之祖、倶盡恭敬、因事經行、到當山則、奇峯繙徼、中間平如礪。實愜懐。感觀音瑞夢、將院付師、藉定賢懇請、革教為禪。号山諸嶽、認行基古趾、扁寺於總持、應薩陲靈符。碧澗水清、卓葛藤子、白巖苔滑、補破爛衫、三松機関、八字開、一脈甘泉、百川漲、加旃皇帝垂十種問、陞為天家功徳寺、覺明、喫三年苦、傳受菩薩戒血脈。行房公書額字、為寺鎮。峩山老護法衣、翼聖化、啓祝釐道場、興出世法席、九應衆請、八坐道場。就中、當山者、五社四神、護三宝、三聖二天、推二輪。

總持寺系は永光寺系と同様に瑩山が大乗寺を退院したことを述べているが、總持寺系ではそれは応長元年であったと示している。その後、城満寺と浄住寺と光孝寺を開いたことが記されている。ただ、瑩山が城満寺に住したのは大乗寺以前のことである。さらに、永光寺系のように能州の滋野信直と夫人が土地を施し、伽藍を開創して、瑩山を開山にしたことが記されているが、そこに永光寺の名は見られない。

總持寺系では總持寺の創建について詳しく触れている。まず、定賢の霊夢について記されており、定賢は瑩山に寺院を寄進し、瑩山がそれを教寺から禅寺に変え、諸嶽山總持寺と名付けたことが説明されている。諸嶽とは行基が開いたとされる諸嶽寺の名前を残し、總持とは菩薩の霊符に応ずるという意味である。後醍醐天皇が十種の勅問を下して、總持寺は

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

皇室の功徳寺となったことが述べられている。このように總持寺の高い立場が強調されている。その後、孤峰覚明（一二七一～一三六一）が三年の修行を経て菩薩戒血脈を伝えたこと、藤原行房（？～一三三七）が總持寺のために額字を書いたこと、峩山韶碩が瑩山の法衣を受けて總持寺を継承したことが述べられている。とりわけ總持寺系で「行房書額字、為寺鎮」とある箇所は、永光寺本でも「行房書七堂額字、為寺鎮」と書かれており、「七堂」という文字は別筆で書かれたものであることから、もともと總持寺系と永光寺系はその箇所は同文であったと判明できる。

おわりに

本稿では『仏慈講式』の先行研究を紹介し、簡単に『仏慈講式』の諸本について論じ、永光寺系と總持寺系の相違点を分析してみた。

報恩講式とは当該寺院の威信を示すための重要な役割を果たしていたことから、永光寺と總持寺でも講式の中で当該寺院の立場を強調している。当該寺院によって開山の伝記の解釈は異なっており、報恩講式とは開山と寺院の由来を寺に集まった人たちに覚えさせるための一つの場であったと考えられる。また、報恩講式とはその時代の宗門が捉えた高僧の姿であり、史実とは幾分隔たりがあるが、その宗門が描く高僧伝が時代によってどのように変化してきたかを知る上では、重要な史料である。

報恩講式に画かれた瑩山の姿と瑩山の伝記史料に記された記事との比較はできなかった。この点については今後の研究課題としたい。さらに、明治時代における瑩山伝の変遷も興味深いものであることから、『太祖佛慈講式』と『洞上伝灯講式』の編集の背景についても調べてみたい。

1 尾崎正善「翻刻『仏慈講式』」（『曹洞宗宗学研究所紀要』第一二号、一九九八年、五五～六七頁）。
2 尾崎正善「「仏慈講式」について」（『宗学研究』第四一号、一九九九年、一一五～一二〇頁）。
3 拙稿「曹洞宗の報恩講式に関する考察―佛慈講式と洞上傳燈講式について―」（『印度學佛教學研究』第五八巻第二号、二〇一〇年、七二六～七二九頁）。
4 尾崎正善氏は「翻刻『仏慈講式』」において總持寺系①②③④と永光寺系①②を翻刻されている。
5 室峰梅逸編『總持寺誌』横浜：大本山總持寺、一九六五年、二四三～六頁。
6 尾崎正善「「仏慈講式」について」一一九頁。
7 尾崎正善「「仏慈講式」について」一一八頁。

〈キーワード〉講式、報恩講式、瑩山、總持寺、永光寺

（駒澤大学大学院・LMUミュンヘン大学大学院）

NII-Electronic Library Service